

柔和な人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24773

柔和な人

大学宗教学主任 北

博

マタイによる福音書、第五章三、一二節

3 「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

4 悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

5 柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

6 義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

7 憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

8 心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

10 義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

11 わたしのためにのしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

今日は有名なイエスの山上の説教の意味を、旧約聖書との連続性を視野に入れながら読み直してみましよう。五節に「柔和な人々は、幸いである、／その人たちは地を受け継ぐ。」と言われているが、ここは詩篇三七編一一節の「貧しい人は地を継ぎ」からの引用です。なぜ「柔和な人々」「貧しい人」なのでしょう。詩篇三七編一一節で「貧しい人」と訳されている語は、民数記一二二章三節では「謙遜」と訳されています。このヘブライ語（ここでは形容詞のアーナーウ、名詞ではアナワー）は、元来「よくしなう」「よく曲がる」と言う意味ですが、転じて「曲げられる」すなわち「抑圧された者」、そして「曲げられても折れない」すなわち「抑圧や苦難を耐え忍ぶ者」という意味になりました。そこで新共同訳聖書では、詩篇三七編一一節で「貧しい者」（ヘブライ語

では複数形のアナーウィーム)、それを引用しているマタイによる福音書九章五節では「柔和な人々」(ギリシア語でやはり複数形のプラエイス)と訳されているのです。

詩篇三七編は、「ハシディーム詩篇」と呼ばれる一群の詩篇の一つです。ハシディームとは神の慈しみ(ヘセド)にすがって生きる人々、それにすがって生きるしかない人々のことです。この言葉は、この詩篇の中では二八節に出て来ます。背景として、迫害状況があったと言われています。抑圧される中で、自らを「貧しい者達」(アナーウィーム)、「神の慈しみに生きる者達」(ハシディーム)、そして「主に従う者達、あるいは神の恵みの業に生きる者達」(ツァッディーキーム、二九節等多数)と自覚した人々は、抑圧に対して沈黙して神を待望し、将来に望みを託しました(七節)。繰り返し言われる「地を継ぐ」と言う表現は、神から配分された土地である「嗣業」の地の正当な権利が守られる、と言う意味です。抑圧されても苛立たず、主に望みを置き、無垢であり、平和の人であること(一八節、三七節)、それがここで勧められている姿勢です。

このような、理不尽な抑圧に対しても自らは手を下さず神の手に委ねるといふ精神的態度は、その後新約聖書に引き継がれ、「柔和な人々」への幸いの宣言となるのです。マタイによる福音書五章に戻りますと、ここで幸いの宣言を受ける人々はやはり理不尽に抑圧され、正義を渴望し、心清く、平和の人で、迫害の中に置かれています。ついでに言いますと、平和のメシアがらばに乗ってやって来ることを預言しているゼカリヤ書九章九節で「高ぶることなく」と訳されている語も、ア

ナーウと同系統のヘブライ語です。このように、神への信頼と待望の生は、旧約聖書と新約聖書を結ぶ信仰の在り方と言えましょう。

ここでもう一度民数記二二章三節に戻りますが、モーセはなぜアーナーウであったとされているのでしょうか。このアーナーウは、我を通さずに物事に柔軟に対応し、腰が低く、したたかに、またしなやかに振舞う人というほどの意味でしょう。新共同訳はそれを「謙遜」と訳していますが、ここで問題になっているのが単なる礼儀やマナーの類ではないことは、言うまでもありません。モーセは申命記三四章一〇節では「預言者」と呼ばれていますが、民数記二二章でのモーセの振舞いは、有無を言わず神の意思を告知する預言者の在り方とは少し違うのではないのでしょうか。これに先立つ一一章では、荒野の放浪の中で飢餓に苦しむ民が不満を爆発させ、それに端を発してモーセの指導者としての適格性が問題になり、批判は更にモーセの私生活へと向けられます。それに対して一二章で神はモーセの適格性を肯定し、「口から口へ、わたしは彼と語り合う／あらわに、謎によらずに。／主の姿を彼は仰ぎ見る。」(八節)とまで言います。モーセはなぜ神の姿を仰ぎ見るこゝとが出来るのでしょう。それは彼のアナワー、つまり自分を低くして、忍耐強く、また粘り強く物事に対応しようとする、彼の振舞いが神に是とされたためではないのでしょうか。マタイによる福音書五章八節にはこう書かれています。「心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。」

このような振舞い、すなわちへりくだって粘り強く対応し、最後は権力的に物事を解決するので

はなく、神の裁きに委ねて将来に望みを託すというような振舞い、これを預言者的在り方に対して黙示的在り方と呼ぶとすれば、黙示的在り方こそが旧約聖書から新約聖書へと注ぎ込まれる聖書の信仰の一貫した流れなのではないでしょうか。曲がらない枝は折れ易いが、よくしなう枝は折れない。このことは、特にいろいろな意味で厳しさを増しているように見えるこの時代に、肝に銘じておくべきことではないでしょうか。どのような時代にも、常に将来に希望を託して、粘り強くしたたかに物事に対処していききたいものです。